

◆年越しのまぎわにテレビの画像が消えた。電器屋さんに見てもらうと、修理しても新しく買うのとさほど変らないというので、新しいテレビに替えてもらった。年明けの月末に、今度はクーラーに異変が出た。二年前転居した部屋に付いていて、保証書を渡されたが読んでいない。ランプが点滅して、中でパチパチと音がする。事故になったら困ると思い、使用を中止した。まもなく節分になり春は近づいているのに、天気予報は冬の嵐になると言う。いままの辛抱だと思っても、風邪などひいたらと思案しながら、迷っているうちに時が過ぎていく。

市川茂子

◆はじめまして、縁あって短歌を載せていただくことになりました。仕事柄（教員）、添削や校正に甘んじてきた身にとつて、作歌をとおし自分と向き合うのは半世紀ぶりです。展覧ならぬ点描、テーマは絞れるべくもなく、「まだ何も書かれていない予定表なんでも書けるこれから書ける」（俵万智）のごとく。ご容赦ください。

大橋千佳子

◆北欧は、スウェーデンの（とりあえずミステリ）作家、ヘニング・マンケルの（スウェーデン南イースタ署の）刑事ヴァランダー・シリーズを読んでいます。ラーソンのミレニアム3部作を読んだあとで、おすすめていうマンケル。生年が同じ一九四八年で、いろいろ同時代性を感じるようなところがあり、読みやすい。ヴァランダーには、娘が一人リンドグがいて、いろいろな志望のあと、イースタ署に警官として赴任直前、一人暮らしの（多忙で私生活がないという）ヴァランダーに同居する。三十歳になろうという娘は、その同居に息苦しさを感じている。そこに事件が起きる、というのが、シリーズ第9作だが。一人暮らししていたこちらにも（下の）息子が同居して一年余り、じぶんには余り話すことがない息子との、そのいくらかは緊張関係がおもいわされて、小説中の父娘のやりとりも切実なのだった。

小野澤繁雄

◆昨年ほとんど雪が降らなかった分、今年はすごい雪である。まさに降り溜めでもしたように雪の毎日が続いている。まもなく立春を迎えるが春はまだ先。少しでも春を感じたいと思う北国山形である。コロナも身近なところで感染者が出ている事態になってきた。春の気配とともにコロナが収まってくれればいいのだが…。「文机の紙縫ひと束日脚伸ぶ」

神村ふじを

◆令和元年は七カ月であったが、令和二年から丸々一年である。きつと良い年になると、希望に満ちたスタートであった。一年を終わってみると、コロナ禍ばかりでなく、異常気象の災害など想定

外の出来事の一年であった。まだ、大雪の予報、緊急事態中と今年に引き継がれている。いずれ、ポストコロナの世に順応できる心の準備をしていきたいと思う。良い世になってくれることを祈っている。

河村郁子

◆結婚してスイスで暮らし始めて38年、この間、世界も日本も色々な意味で劇的な変化を遂げました。元々は外の人間だったからこそ見えるスイス、逆に、外にいるからこそ見える日本もあるかもしれません。「スイスからの便り」、折につけ見聞きし、感じたことなどをお伝えできたらと思います。コロナ禍で人々の気持ちも沈みがちな毎日です。街路や野辺にある木々が花をつけるスイスの美しい春を心待ちにしています。

ギンジック恭子

◆百人一首を書きながら書棚にある古い本を見直した。三木幸信『解釈と鑑賞小倉百人一首』（京都書房）である。初版一九六二年、新訂版三八刷一九七四年発行で、出身高校から生徒全員に渡されたものだ。高校では、かるた大会が毎年あり、学級代表にもなったことがある。大切にしていたわけでもないが、五十年近く傍らに残った最古参の本だ。調べると今も改訂を重ねている、ご長寿参考書である。

新関伸也

◆今年も葉山元旦登山ができて幸運だった。年末年始は大荒れという予報は、ここ置賜地方（山形県）には当てはまらず、風もなく静かに雪が降る穏やかといえる一日となった。今年で三十一年目。仲間がいるからできることだ。今回のメンバーは、中学一年生から六十七歳までの五人。七十歳まであと四年登るのが私の目標。山頂の葉山権現に「コロナが早く収まりますように」と手を合わせてきた。しかし、このところコロナ禍は拡大深化するばかり。異常気象が追い打ちをかける。これだけ世の中の状況が悪くなると、日々のささやかな出来事や出会いに楽しみを見いだす努力（？）をしようかと思ってみる。今までは自虐的に苦しいことを探していた私だけれど。今回の句はそんな思いで詠んだ。誰かが俳句は肯定の文学だと言っていたなあ。

新野祐子

◆昨年夏の脊椎骨折の治療後、胴体に巻きつけていたプラスチックのコルセットを、最近になって、「はずしてよい」との許可が出た。ところがはずしてみると、ひどく歩きにくい。コルセットのせいで胴体の筋肉が落ちてしまったからだそうで、筋肉を取り戻すためには、毎日、日に三、四キロは歩くとよい、と言われていたが、これを実行するのはなかなか難儀である。

松井淑子

◆介護の仕事を始めて春で七年目に入る。文章を書かなくなり、介護の仕事に専念するようになった後、なんだか、自分の価値が一段低くなった気分になった。同級生に会ったとき、「そう。

コピーライターを辞めたの。残念だね」と言われ、そうか、残念なんだ、と思った。そうした折に触れ、文章のことを考えると、自分にはやり残しがあるようなモヤモヤした気持ちが生まれていたが、最近、それはそれでいいや、と言いついて聞かせている。この六年間の自分の頑張り、私がいちばん知っている。私は、私を信頼している。だから、やり残したことがあっても、もう、気にしなくていいよ、と自分を許そうと思う。

山内裕子

新会員紹介

大橋千佳子(おおはし ちかこ) …… 一九五七年、山形県白鷹町生まれ。元中学校教員。現在、私立専門学校講師。

ギンジツク 恭子(きょうこ) …… 一九五四年福島県に生まれ、五歳から東京で暮らす。大学卒業後、企業会員団体の事務局に勤務。一九八三年からスイス在住。異言語・異文化間理解交流、日本の文化紹介の仕事と活動に携わる。家族は、スイス人の夫と息子一人。趣味は、絵を描くこと、歌うこと、朗読。